

Illustrations of Political Economy における 経済学と文学の融合：

Ella of Garveloch と *Weal and Woe in Garveloch*

松 本 三枝子

序

ハリエット・マーティノーは、19世紀イギリスにおいて、著名な作家であり、社会的にも政治的にも多くの影響力を及ぼした女性であった。しかし、彼女のそのような存在と影響力が、現在では正当に評価されているとは言い難い。その理由はいくつか考えられる。例えば、彼女が執筆対象としている領域が、哲学、文学、歴史、政治、経済、医学、教育等の広範囲に及んでいるために、彼女の業績の全体像が把握しきれていないことがある。加えて、この時代の女性作家に共通する傾向なのだが、3巻本の小説から、単行本、冊子、新聞・雑誌等の定期刊行物に掲載された社説、略伝、記事等、その数が極めて多い。特に、後半生は、*Daily News* (London) を中心に社説、エッセイ、略伝等を書き続けているので、ジャーナリストとして活躍したと考えられる。つまり、現在のように学問領域の専門化が進んだ時代では、学際的というよりは、領域横断的なマーティノーの全体像を適切に評価する尺度や基準が設けにくいのである。

本論では、そのような彼女が作家としての地位を確立した *Illustrations of Political Economy* (1832-34)¹ が持つ文学性に注目し、特にこのシリーズの第5話である *Ella of Garveloch* と、第6話の *Weal and Woe in Garveloch* を中心に分析したい。『経済学例解』は月刊で出版されたシリーズで全25巻からなる。Political Economy とは19世紀の経済学であり、アダム・スミス『国富論』(1776)、マルサス『人口論』(1798)、ジェイムズ・ミル『経済学綱要』(1821)、デイヴィッド・リカード『経済学及び課税の原理』(1817) 等、こ

の時代の“new science”を意味している。そのような新しい学問を物語により解説することが、このシリーズの目的であった。マーティノーはこのシリーズの序で次のようにその目的を書いている。

There are a few, a very few, which teach the science systematically as far as it is yet understood. These too are very valuable: but they do not give us what we want—the science in a familiar, practical form. They give us its history; they give us its philosophy; but we want its picture. (emphasis added)²

彼女が経済学の分野で評価されるとすれば、それは上記のように経済学を親しみ易く実的な形式で、解説した功績である。³ さらに、その功績について、Broadview 版の *Illustrations of Political Economy* の序で、Deborah Anna Logan は、マーティノーが何故に、経済学をより多くの人々に普及させようと意図したのかを端的に述べている。

Martineau's contribution to this discourse is distinguished by her desire to make it accessible to a wider audience than the intellectually elite and to model more practical solutions to social problems than the theorist offered....Martineau's series succeeded in popularizing political economy, aptly reflecting the general urge toward the democratization of social, economic, and political resources, an ideology that shook British complacency in 1832, no less than in 1776. (emphasis added)⁴

ローガンの指摘にもあるように、マーティノーは、経済学をより多くの人々が理解することにより、19世紀初期のイギリス社会が直面していた様々な問題を解決することを望んでいた。教育を重視することにより、社会改革を成し遂げようとするマーティノーの考え方は、労使対立、奴隷制廃止、植民地主義等の問題を議論するに際して、この後も一貫しているものだ。

次に、『経済学例解』において忘れてはならないのが、経済学を大衆化するために、マーティノーが選択した方法である。彼女は自伝においても、ジェ

イン・マーセットの『経済学対話』（1816）が、自らのシリーズの誕生に影響を与えたと言及している。マーティノーはマーセットの略伝を『デイリー・ニュース』に書いており、先達、指導者として高く評価している。二人の大きな相違は、マーセットが、会話により経済学を解説する一方で、マーティノーは物語により経済学を解説したことである。⁵ これまでにも、マーティノーが物語形式により、同時代の社会問題を網羅的に表現したことや、この後に誕生することになるイギリス社会小説との関係性を議論する研究者はいる。

例えば、ルイ・カザミアン『イギリスの社会小説』は、マーティノーの『経済学例解』を構成している物語が、小説“novel”の水準には達していないと論じながらも、「功利主義小説」“utilitarian novel”と敢えて名付け、チャールズ・ディケンズらの「社会小説」“social novel”とは異なる種類とし、次のように述べている。

...the origins of the utilitarian novel were singular. It looked back to an isolated group of original works produced by the fusion of rationalism and imaginative literature at the end of the eighteenth century. By comparison the sort of social novel Dickens wrote belonged to a continuing, unbroken tradition, embedded in the instructive and moral quality apparent throughout English art, and reflecting the constant English preoccupation with the ethical goals which artists and common humanity alike may pursue. (emphasis added)⁶

カザミアンに依れば、功利主義小説は、合理主義思想と文学の融合により生み出され、他方、社会小説には「教訓的で道徳的特質」があり、イギリス芸術全般とその特徴を共有している。『経済学例解』の物語が、社会思想を解説する物語であることは確かであるが、実際に読んでみると、この約10年後に誕生することになるディケンズらの社会小説が持つ教訓的で、道徳的特質をやはり持っていることがわかる。ただその特質が全く同じものであるのかどうかは検証するに値する問題である。

それゆえに、本論では、『ガーヴェロッホのエラ』と『ガーヴェロッホの喜

びと悲しみ』の文学性に注目しながら、これらの物語の特徴を検証したい。この物語は、ヴィクトリア女王もお気に入りといわれた人気の物語であり、女主人公エラの物語である。⁷

I 強い女主人公エラの登場：『ガーヴェロホのエラ』

『ガーヴェロホのエラ』は、地代の仕組みについて解説する物語である。舞台は、スコットランドの辺境の小島であるガーヴェロホである。その貧しい漁村で、親を亡くした3人の兄弟、Ronald、Fergus、Archieの世話をする母親代わりの20歳代半ばのエラを中心に話は展開する。彼女は、鯨漁で生計を立てるために、漁船を繰り、年貢を納め、地代の交渉を地主とする自立した、精神力のある力強いヒロインとして描かれている。

Tall and gaunt in person, and thinking as little of adornment in dress as her countrywomen in general, on ordinary occasions, there was nothing at first sight to attract a stranger. Her feet were bare, according to the universal custom; her hair, unconfined by any cap, hanging down from under the plaid which she had drawn over her head...⁸

野育ちのやつれた女として、地主の前にエラは登場する。地主は、自らの代理人が、借地人のエラに従属を強いるのを咎めて次のように言っている。マーティノーの考えが反映されている重要な箇所なので引用する。

“Only go to England, and you will see that landlord and tenant are not master and slave, as we in the Highlands have ever been apt to think. In my opinion, their connexion stands thus,—and I tell it you, that you may take care not to exact an obedience which I am far from wishing to claim from my tenants,—the owner and occupier of a farm, or other estate, both wish to make gain, and for this purpose unite their resources.” (EG 15, emphasis added)

イギリスの例を挙げて、地主と借地人とは主人と奴隷のような関係ではなく、

共に土地から利益を上げるという共通の目的で結ばれていると説く。通常は、上下関係、しばしば対立関係で理解される地主と借地人を、冷静に契約に依る対等な関係と見なそうとする考え方である。

同様な思想が、『経済学例解』の第7巻 *A Manchester Strike* でも述べられている。ここでは、地主と借地人は、資本家と労働者になるが、対立関係に陥りやすい両者が共有関係で捉えられている点が共通している。例えば、「商品は、資本と労働力により生み出されるので、資本家と労働者の共有の資産である」と巻末にまとめられ、物語の随所にそのような思想が述べられている。資本家と労働者に歴然とした貧富の差がある時に、対等であるかのような考え方は、欺瞞的にも受け取れる。しかし、マーティノーは敢えて対等な関係に両者をおくことにより、労働者側に十分な情報と知識を与える必要と、そうした上での選択と責任を求めていくのである。

このような考え方が、『ガーヴェロツホのエラ』でも述べられている。地主は、エラに地代の仕組みを説明する。地代は、生産性の大きい豊かな土地では高くなるが、借地人はそれにより他の土地よりも多くの利益を得ることができる。さらに、需要と供給のバランスも地代に影響を与える。これらの説明を地主は、エラにした上で、年20シリングで、家と畑を貸すことにする。さらにエラが経済的に自立していくために、カナダから帰国した恋人の *Angus* が重要な役割を果たすことになる。彼は、カナダで5年間、貴族の代理人（執事）として働いた経験を活かして、エラと彼女の一家を助けていく。島民のほとんどが字を読めないガーヴェロツホで、アンガスの存在は先進的知識と有為な経験を象徴する存在として機能する。つまり、エラはアンガスとの結婚により、ガーヴェロツホの底辺に喘ぐ家族から抜け出すことに成功する。しかし、アンガスは家父長として一家を支えるのではなく、エラが一家の中心に留まっているように語られている。

このように20歳代半ばのエラは、生活におわれて貧しいながらも、精神力があり、力強いヒロインとして描かれている。美しくもなく、洗練されていないわけでもないが、エラは生活力にあふれた、魅力的なヒロインである。美貌ではなく、精神力と、家族への一途な献身により、彼女の人間性が語られる。さ

らに、神の摂理への絶対の信頼により、彼女には、迷いも不安もない。それゆえ、物語結末で、知恵遅れの愛する弟のアーチャーが兄弟を助けようとして、水難事故で亡くなった時にも、エラはその死を受け入れる。

An expression of unspeakable anguish passed over her countenance as Fergus mourned that he had been saved by Archie's loss.

"Nay, Fergus," said she, "let us leave it to Him who guides us, to show whose life had best be taken and whose left." (*EG* 140)

現代の読者から見れば、差別的ともいえるエラの考え方であるが、二人の弟の一人を神がお召しになるのであれば、それはアーチャーであると認め、それを甘受している。それは弟を犠牲にして、自らが助かった、ファーガスへの慰めの言葉でもある。このような考え方の背景には、功利主義的思想があるのは明らかだが、同時にユニテリアンとして、神を絶対視する彼女の宗教観がある。神の摂理をどのように理解するのかについて、Catherine Gallagher が、同じユニテリアンの小説家である Elizabeth Gaskell とマーティノーを比較し、後者の思想を次のように批判している。長い引用になるが、マーティノーの特徴が明らかにされている箇所であるので引用する。

... important differences in their fiction can be traced to their disparate attitudes toward causality and free will. Martineau believed that Providence worked through natural laws that precluded human free will, whereas Gaskell, without abandoning the idea of Providence, tried to make room in her fiction for moral freedom. Gaskell's use of causality, like that of many other thoughtful Unitarians of 1840s, was less consistent than Martineau's. It was, however, her very inconsistency, her refusal to be tied down to a single explanatory mode, that marked Elizabeth Gaskell's advance over Harriet Martineau in the craft of novel writing. (emphasis added)⁹

キリストの神性を認めず、神と神の摂理を絶対視するユニテリアンの思想は、

マーティノーにおいては、厳格に運用されている。ギャラガーは、その揺るぎなさ、その狭量さには、物語が誕生する余地がないと批判している。もっとも、ギャラガーが、マーティノーの『経済学例解』と比較しているのは、ギャスケルの『メアリ・バートン』、『北と南』等の社会小説である。前者は物語形式で経済学を解説したものであり、後者は長編小説である。同一の俎上で議論するのは公平ではないようにも感じられる。知恵遅れのアーチャーが犠牲になり、ファーガスが代わりに救われるという結果を、「誰の命が召され、誰が救われるのが最も良いのかは、私たちを導いて下さる神様にお任せしましょう」(EG 140) とファーガスに語るエラには、神の摂理に対する不満や不信は微塵も感じられない。加えて、行方不明となっていたアーチャーの亡骸を探し出し、父の墓の隣に埋葬したいという彼女の神への絶対的信頼と、厳格な信仰は、あまりに模範的で宗教書のようにも見える。

しかし、人間の自由意志が発揮される場所を、マーティノーが明らかにしているのも事実である。それが教育である。地主の代理人カラムは、旧弊な考えの持ち主で、地主に隷従するが、借地人を無視し、エラの一家を冷遇する。しかし、地主から地代について、直接説明を受けたエラは、現状を理解することができ、将来への展望を持ち、貧困から抜け出そうと努力し続ける。カラムは、そのようなエラから、なぜ地代とその仕組みを説明しないのかと問われ、次のように考えを変えていく。

He began...to think that it would make matters very easy to have the tenantry enlightened upon the subject of rent: and when an amicable agreement was presently concluded about the lease, and the blanks filled up without dispute, he said to himself that it was pleasant to have to do with reasonable people.... (EG 131, emphasis added)

土地の賃貸の契約において、地代について説明するのは当然であろうが、それが十分なされぬガーヴェロツホでは、新規に契約する人もなく、島内では問題がこじれることにもなる。“to have the tenantry enlightened upon the subject of the rent”、地代について借地人に「教える、知らせる」ことが、仕事を円滑にす

るとカラムは気づき始める。“enlighten”という表現が元来持っている、光を入れて、はっきりと照らし物事を理解することの重要性和、それによる個人の意識の変化が、社会へもたらす影響力をここでは注目しておきたい。

とりわけ、この物語で、エラを初めとするガーヴェロツホの人々を啓蒙する役目を果たすのが、5年間カナダで貴族の代理人として働いた経験を持つアンガスである。彼はガーヴェロツホと他の島とを結ぶ船を走らせることにより、流通経路を確保し、ガーヴェロツホを飛躍的に文明化していく。アンガスは、エラの恋人であり、やがて二人は結婚することになる。しかし、『ガーヴェロツホのエラ』は、エラが如何に最下層の生活から、より良い生活へと上昇していくのかを語っている物語である。確かに、地代の仕組みの説明は、重要なテーマであろうが、物語の魅力は、ヒロインのエラにある。島育ちの彼女の野性的ともいえる力強い身体と精神は、彼女の宗教観と相俟って、地主の代理人等からの冷遇や嫌がらせに直面しても怯むことはない、弟アーチャーの死に際しても耐えてこれを甘受することができる。つまり、エラは親に先立たれ貧困の中にありながら、不安や迷いというものとは無縁の存在なのである。そのようなエラがアンガスに助けられ、啓蒙された存在として、ガーヴェロツホでどのように生きていくのか、『ガーヴェロツホのエラ』の続刊となる『ガーヴェロツホの喜びと悲しみ』を次章で検証しよう。

II 啓蒙されたエラ：『ガーヴェロツホの喜びと悲しみ』

『ガーヴェロツホの喜びと悲しみ』に付けられた巻末のまとめに依れば、この物語は、人口抑制について解説している。独身の若い女性であったマーティノーが、人口抑制について論じることは、この時代の社会規範を考えれば、大きな反感と抵抗があったことが予想できる。例えば、岸英朗は次のように当時の状況を書いている。

ここで扱う人口問題は、マルサスは言うまでもなく、J. ミルの人口増加防止の策——貧困と晩婚と子供を産まぬ分別というのが前提となっている。マーチノウはこの物語を書いている時、世の批判を恐れて何度も冷や汗が顔に浮か

んだと述懐している。(中略) 彼女の母と叔母の分別ある同意が得られなければこの物語は日の目を見なかったであろう。¹⁰

独身女性であるマーティノーが、人口抑制を議論することへの抵抗は、自伝でも詳しく書かれ、Ruth Watts も、この後10年にわたり *Quarterly Review* は彼女を冷遇批判したと言及していて、その反感と嫌悪の大きさが推察できる。¹¹

この物語が、ミルやマルサスの人口論を如何に語っているのか、その文学性に注目しながら検証するのが、本論の目的である。辺境の孤島であったガーヴェロッホが、アンガスを始めとする外からの啓蒙により変化していく有り様を、どのように描いているのかを見ていきたい。

この物語は、140頁程の中編小説である。前半は、ガーヴェロッホの繁栄を語り、後半はその結果を語っている。第1章「時代は変わった」では、島の権利が既に、前刊『ガーヴェロッホのエラ』で登場した啓蒙的地主から、漁業会社に売られて10年が経ている。エラとアンガスの夫婦は9人の家族となっており、彼女の二人の弟、ファーガスは結婚し、ロナルドも自立している。以前の寒村ガーヴェロッホとは全く異なり、漁業を中心に、豊かな生活が営まれていることがわかる。とりわけその年は、漁業も農業も恵まれていることが、次のエラの言葉から理解できる。

“It is a rich season, indeed,” said Ella. “The shoals are such as Angus never saw before, for the multitude and the quality of the fish; and what is more, the crops are coming up kindly, and farmer Duff says that he reckons on the best harvest he has since he took the farm.”¹²

このように自然にも、幸運にも恵まれ、繁栄する年月を経て、エラの家族のみではなく、島民の数が増加していることが言及されている (WWG 21)。貧困が克服され、豊かで安定した生活により、人口が増加していくのは当然の成り行きである。しかし、そこでは、時代の変化に適応できる人々と、取り残される人々が描かれている。人間関係は、複雑になり、嫉妬や羨望から様々の事件

が起きるが、明らかに島は文明化されている。かつては、単なるいたずらや、嫌がらせと見過ごされた事件が、正義や保証を求めて訴訟となり、判事の登場することも少なくない。その判事が、ファーガスの漁網を嫉妬から破壊したロブの行為について、次のように語る箇所がある。

“The first sign of their [the miseries]’ approach...is when men begin to fancy their interests of men in society can never be. Fair competition leads to the improvement of the state of all; but the jealousy which tempts to injure any interest whatever is the infallible token that distress is at hand.” (WWG 39)

このような繁栄した島に、不幸が訪れるとすれば、互いの嫉妬心からだと言判事は語り、アンガスにもカナダで同様の経験をしていないかと問う。公平な競争が社会を改善していくとする一方で、そこに暮らす人間同士の嫉妬心が不幸を招くことにもなる。しかし、ガーヴェロッホでは、新たな市場が開拓され、労働力の需要は高まり、賃金も上昇する。貧しさゆえに嫉妬にかられ、嫌がらせをする等の卑俗な行為も影を潜める。

しかし、島の不幸はそのような繁栄と豊かさの結果、人口が増加したことから生ずることになる。再びエラの発言である。

“We have not the power of increasing food as fast as our numbers may increase; but we have the power limiting our numbers to agree with the supply of food. This is the gentle check which is put into our own hands; and if we will not use it, we must not repine if harsher checks follow.” (WWG 97, emphasis added)

ここでエラは、人口増加に見合うだけの食糧を増産ができないため不幸になるのであるならば、人口抑制が必要になると、隣人のケイティに語っている。

この物語におけるエラとケイティの会話は、ジェイン・マーセットの『経済学対話』を想起させる形式である。『経済学対話』では、女教師と女生徒の会話により、経済学がわかり易く解説されていくのだが、同様に、『ガーヴェ

ロツホの喜びと悲しみ』では、隣人であるエラとケイティの会話により、人口抑制の問題が議論され説明されていく。ケイティがエラから学ぶように、読者が人口抑制の問題を理解できるように語られている。

人口抑制は、ガーヴェロツホの中のみではなく、島外のような社会にも関係が及ぶ社会的、政治的問題であった。貧しさゆえに結婚できないものたちは、植民地へ行けば大歓迎され、子沢山の大家族も皆重要な働き手となる（*WWG* 99）。人口と食糧のバランスのみならず、労働力の需要と供給の関係により、人口問題は考えるべきだと説かれている。植民地を人口問題の解決の場所と考えるのは、マーティノーばかりではない。この数十年後に、イギリスは女性人口が男性人口を上回る、いわゆる余った女の時代が到来する。女子移民協会等は女性たちを植民地へ送り出そうとし、女性雑誌はガヴァネス等の女性の職業の需要があると宣伝を掲載したりした。¹³ これらの提案は、社会問題の解決を植民地に押し付けるような手法である。

さらに、中国やインドで、女兒が間引かれるという話題（*WWG* 101）まで登場する。食糧難や飢饉の状況で、栄養失調や病気で多くの子供が亡くなり、食糧不足のために子殺しまでもが行われるならば、むしろ人口を抑制すべきだと、エラはケイティに述べている。上記引用文での「人間が穏やかな抑制を実施できなければ、神による厳しい抑制を嘆くことはできない」と言う状況が、極めて具体的に、ガーヴェロツホの社会を実例として語られている。ガーヴェロツホでは、飢饉に見舞われ、ファーガスの子供達等多くの犠牲者が出る。軍隊の勧誘も盛んになり、エラの子供もそれに応じたことがわかる。戦争や疫病等により、暴力的に人口を減少させるのではなく、より適切で、穏やかな方法があると、アンガスは物語の結末で語る。

“Marriage is less general, and takes place at a later age—at least among the middling classes, whose example will, I trust, be soon followed by their poorer neighbours. Whenever any one class gains a clear understanding of the reasons why a thing has been, and why it should no longer be, there is room for hope that other classes will in time enter into their views, and act accordingly.” (*WWG* 136-37)

中産階級を模範とする上記のような考え方は、確かに有益な部分もある。中産階級のように、少ない数の子供を大切に育てていくことは、労働者階級の家族が多くの子供を産みながらも、4歳までにその大半が亡くなってしまふことを考えれば、当然の改善策である。さらに早婚と子沢山の労働者階級の家族が、失業や飢饉等を契機として、転落の人生を歩んでいくことも、まぎれもない事実である。

物語は、穏やかな人口抑制として、ケイティとロナルドの関係についても語ることを忘れていない。彼らは元来相思相愛の関係であったが、ケイティは他の男と結婚し、いまは未亡人となっている。普通ならば二人は結婚しても良さそうなものだが、二人の関係はあくまで友情に終わっており、結婚へと進むことはない。つまり、ロナルドには家族を養う十分な収入があるが、彼女と結婚して子供をつくるという選択はないのである。このような描写が前述したように、Catherine Gallagher の次のような批判の対象となることはやむを得ないといふべきであろう。

...important differences in their fiction can be traced to their disparate attitudes toward causality and free will. Martineau believed that Providence worked through natural laws that precluded human free will, whereas Gaskell, without abandoning the idea of Providence, tried to make room in her fiction for moral freedom. (emphasis added)¹⁴

マーティノーもギヤスケルも同じユニテリアンでありながら、二人の宗教観、神の摂理と人間の自由意志に対する考え方には相違がある。ギヤラガーに依れば、マーティノーは自由意志を排除した自然法を介して神の摂理は働くと考えている。それに比較して、ギヤスケルの場合は、神の摂理を排除することなく、人間の自由意志が働く余地があり、そこに小説、つまり物語が語られる空間がある。

確かにこれまで『ガーヴェロッホのエラ』と『ガーヴェロッホの喜びと悲しみ』を分析した結果から明らかになるのは、人間にとり厳格過ぎるとも感じられる神の摂理への圧倒的な信頼と、揺るぎない信仰である。例えば『ガーヴェ

『ロッホの喜びと悲しみ』で明らかにされるのは、幸福な社会を築くためには、人口と食糧のバランスが不可欠であるという考えである。そのために神の摂理が、厳しい人口抑制を実施する前に、摂理に従い人間が自ら進んで、穏やかな抑制をすることが肝心であると説いている。神の摂理にかなった人間による穏やかな抑制とは、つまり、結婚を遅らせることと、出産を減らすことである。少ない数の子供を十分に養育することで、社会改善と安定した社会を実現しようとするのが、この物語の狙いである。その目的へ向かって、物語は全くぶれることなく、一直線に語られている。ファーガスの子供達の死も、ケネスの軍隊への入隊も、ロナルドのケイティに対する禁欲主義の実践も、神の摂理にかなったものとして、全て甘受すべきことなのである。

しかし、この物語を読んでいる読者は、飢饉の中で幼い子供を失う貧しいファーガスの悲しみや、ケネスが口減らしのために入隊を決意したことを甘受するエラの母親としての苦悩、相思相愛でありながら結婚できないロナルドとケイティの諦観等を想像することができる。しかし、岸英朗が指摘するように、それぞれの登場人物は、必ずしも十分に描かれているとは言えない。

純粋に文芸作品を愛好する人々、ストーリーの起伏や波乱や、E.M. フォースター言うところの「ラウンド」な性格描写にこだわる読者には、作者がアンガスたちに語らせる地代論や経済流通論は小説の枠を超え、ストーリーの展開が停滞すると思われる箇所であろう。¹⁵

確かに、登場人物は、エラを除いては十分にその個性を描ききられてはいない。そして、エラとアンガス、エラとケイティの会話が、物語の展開上に必要な会話というよりも、物語の目的である人口抑制を議論するために不可欠なものと感じられることは、認めざるを得ない。しかし、ガーヴェロッホの島民の人間関係や、夫婦関係、家族関係等は、物語に奥行きと現実性を与え、説得力がある描写となっている。Mary Russell Mitford を始めとする同時代の女性たちが、『経済学例解』を、物語として楽しんだと告白している。彼女達は、経済学に関する巻末のまとめや、教えを読み飛ばして読んでいたのである。¹⁶ 例えば、

『ガーヴェロツホの喜びと悲しみ』の結末で次のように語られるとき、読者は小説の結末で感じるのと同様なカタルシスを味わえたのではないだろうか。

She [Ella] had, from childhood, filled a station of authority, and had never abused her power, but made it the means of living for others. Her power increased with every year of her life, and with it grew her scrupulous watchfulness over its exercise, till the same open heart, penetrating eye, and ready hand...gave her an extensive influence over the weal and woe of Garveloch. (*WWG* 139)

このようなヒロインの造形には、マーティノーの思想が反映されていると考えられる。エラは人口抑制を語るための登場人物として造形されているが、19世紀初期のイギリス社会のジェンダー観からいえば、極めて革新的な女性となっており、マーティノーの女性に関する考え方が滲み出ている。経済学を解説する手段であるはずのエラは、物語の中心でその魅力を発揮する存在となっている。

明らかに、エラは下層階級の女性として描かれ、その後豊かな生活を営むことができるようになっても、中産階級のジェンダー観に拘束されることはない。“respectability”とは無縁の最下層の生活の中で、彼女は労働することを肯定的に捉える、生活力旺盛な女性として描かれている。アンガスとの結婚後も、彼女は扶養家族としてではなく、稼ぎ手として家族を支えている。彼女は家庭の中に閉じ込められた「家庭の天使」となることはない。この後、マーティノーは、中産階級の姉妹を中心にした小説『ディアブルック』(1839)を書く。両親がいないという意味では、エラと共通するイボットソン姉妹や、家庭教師のマライア・ヤングは、この時代のイギリス社会が求めるジェンダー観に拘束され、中産階級の女性に求められた“respectability”を遵守するために、自我と葛藤する様が克明に描かれている。19世紀のイギリス社会において、自制を求められて生きる中産階級の女性たちにとり、エラのようにスコットランドの辺境に、自然と苦闘しながら、逞しく生きる最下層の女性は、生活力に溢れた力強く魅力的なヒロインであった。エラが、ヴィクトリア女王のお気に

入りのヒロインであったと言われるのも、理解できる。エラは、男性に扶養され男性に依存することを当然とする考え方に、批判的であるかのように描かれている。そのようなヒロインの造形には、マーティノー自身の女性観が無意識のうちに反映されたものといえるだろう。

III 『経済学例解』の文学性：Unitarianism と教育

本論の冒頭で述べたように、マーティノーが『経済学例解』を書いたのは、労働者階級の人びとが、新しい科学である経済学を理解することにより、貧困や労使対立、変化する社会への適応等、多くの社会問題を解決する方途を提供しようとしたためであった。そのようなマーティノーの考え方には、ユニテリアンとしての宗教観、教育観が反映されている。例えば、岸英朗は次のように書いている。

もしマーチノウが誠実な英国国教徒だったら、当時ニューサイエンスのひとつだった経済学説にこれほど関心を深めることができたかどうか疑問である。彼女が人びとの経済的営為を市民社会の発展という視野で捉えることができたのは、カルヴィニズムの系譜をひくユニテリアンの家庭に育ったからに他ならない。¹⁷

加えて、マーティノーがノリッジの産業ブルジョワジーの出身であることも、彼女が“political economy”に関心を持った重要な理由であろう。同じユニテリアンの女性作家に Elizabeth Gaskell がいるが、彼女が社会小説 *Mary Barton* (1848) の序で、「経済学」、とりわけ「自由放任経済」との関係を取上げて否定したのは、あまりにも有名なことである。¹⁸ しかし、そのような作家の言葉を文字通りに受け取る研究者は少ない。¹⁹ ギヤスケルの夫は、ユニテリアン派の牧師であった。彼の信徒の中には産業ブルジョワジーや銀行家等がいたため、『メアリ・バートン』が、彼らを刺激することなく、労働者階級への関心と共感を喚起できるように、ギヤスケルは苦勞したのである。共にユニテリアンであるマーティノーとギヤスケルが、マンチェスターの労働者問題を扱っている

ことは注目すべきであり、ユニテリアンの女性作家が社会問題の解決に積極的に関与しようとしたことが重要である。特に、マーティノーの『経済学例解』では、労働者階級の啓蒙が重要視されている。それは、次のような考え方と共鳴するものであったろう。

Insofar that even hardened capitalists like Samuel Robinson believed ‘knowledge is power’ and if such knowledge was justified for one class it should not be denied another, their educational initiatives were generous in concept. Radical even in believing in a wide education for all, many Unitarians could genuinely support self-help through education and cultural and moral reform since this was the means by which they had achieved success.²⁰

Mechanics’ Institute 等を始めとする労働者学校での教育と同様の働きを、マーティノーの『経済学例解』は果たしていたことになる。社会問題の解決や、社会改革にあたり、教育の役割を重視するこのようなユニテリアンの考え方は、知識や理性を重視するその宗教観に通底するものである。それは、視点を変えて考えれば、“self-help” 等の個人の努力による改善が重要視されていることになる。例えば、労使対立や貧困等を扱った社会小説である『メアリ・パートナー』が、実際的な問題解決の方法を提示していないことを批判する研究者に対して、Josephine Guy は、この時代の社会問題の解決が個人の意識変革を重視する状況であったと分析している。

...an understanding of the social, and therefore of social causation and social change, was always made by reference to individual agency. Poverty and disease, conflicts between masters and men, inequality of wealth, and so on—all these large-scale issues were addressed by recommending changes in *individual behaviours* rather than changes to social structures.²¹

上記の思考は、Thomas Carlyle が “Condition of England” と称した様々な社会

問題を抱えたイギリス社会の改善や変革の起点を、社会構造やその枠組ではなく、個人の意識におく考え方である。個人が、富の分配の不平等や貧困問題を理解し、解決するために努力することが、結果として問題の解決へと導くことになると考えている。ある意味で、極めて楽観主義的な思考であるとも言える。

しかし、そのような社会改善への展望と楽観主義は、『ガーヴェロツホのエラ』や『ガーヴェロツホの喜びと悲しみ』に共通する思想でもある。最下層に位置づけられる生活にもかかわらず、エラの神に対する信頼と旺盛な生活力は、不安や恐れ等に干渉されることを知らない、極めて肯定的かつ楽観主義的なものである。功利主義思想は、経済学を解説しようとするマーティノーの意図に大きな影響を与えたのみならず、ヒロインのエラの造形と魅力にまで及んでいるのである。

結び

本論では、『ガーヴェロツホのエラ』と『ガーヴェロツホの喜びと悲しみ』の主人公が若い女性であることに注目し、考察を重ねた。マーティノーは辺境の寒村ガーヴェロツホが文明化され、豊かな社会へと変化する物語の主人公に、外部の社会を知るアンガスや、教養ある女性として“lady of island”と呼ばれるケイティではなく、野育ちの娘エラを選択した。それは、そのような娘が、結婚し妻となり母となる成長の過程を、ガーヴェロツホの発展と平行して語ろうとしたからであろう。しかし、前述したように、そのエラがガーヴェロツホの社会の喜びや悲しみにまで影響を与えるようになったという結末は、女性の存在と役割を重視するマーティノーの思想が現れたものと考えられる。『ガーヴェロツホのエラ』では、彼女は地代の仕組みもわからぬ無知な娘であるが、地主やアンガスにより教育を受け成長していく。それゆえ、『ガーヴェロツホの喜びと悲しみ』では、彼女は無知蒙昧な娘ではもはやなく、大家族の母となり、むしろケイティに人口抑制について語る立場となっている。自助努力するエラが、最下層から安定した生活と蓄えを持つに到るまでに上昇していく過程を示すことにより、地代の仕組みや人口抑制を説明するのみ

ならず、社会の階段を上昇する過程を、読者が経験することができるように、これら二つの物語は構成されている。

端的に言えば、社会上昇の成功例を体験できるように、『ガーヴェロッホのエラ』と『ガーヴェロッホの喜びと悲しみ』は語られている。それゆえ、これらの物語は、寒村で両親を亡くし弟たちを抱えて、貧しい生活に苦しむエラが、いかに奮闘努力してより良い生活を手に入れたかを語っていく。彼女は、この時代のイギリス小説にしばしば登場する“self-made man”の女性版であり、その先駆者といってよいだろう。

Valerie Sanders は、マーティノーの『経済学例解』の先駆性について、次のように分析している。

Her [Martineau's] tales discussed all the most topical questions that were agitating the country in the 1830s, at least ten years before the major Victorian novelists began to consider them. Unemployment, the poor, true and false religion, the meaning of love and its importance, the role of women in a changing society, parent-child relationships, education, trade unions, emigration, taxation, socialism, the French Revolution, Irish disaffection, the bank crashes, the replacement of men by machinery in certain industries: all these are topics covered by her *Illustrations* alone, though she often returned to them in her later works.²²

ここで、サンダーズは、『経済学例解』に収められた物語がいかに網羅的にこの時代の社会問題を語っているか、またそれらの社会問題を小説家が扱うより10年も早く扱った先駆性を指摘している。本論では、このようなサンダーズの指摘に加えて、これらの物語が、経済学の単なる解説書ではなく、十分な文学性を持っていることに注目し、魅力的ヒロインとプロットの特徴を検証した。『ガーヴェロッホのエラ』と『ガーヴェロッホの喜びと悲しみ』の二つの物語は、エラという自助努力し、立身出世する女性の物語であり、彼女の人生行路は、まさに成功物語のカタルシスを読者に与えるものとなっている。教え樂しますという、19世紀イギリス小説の典型として、評価され注目されるべ

き物語である。

注

- 1 *Illustrations of Political Economy* の日本語訳は実に様々である。アダム・スミス『国富論』、マルサス『人口論』、リカード『財政学』、ジェイムズ・ミル『経済学綱要』等の当時新しい学問であった古典派経済学を、物語形式で解説したシリーズであることをわかりやすく表現するため、本論では『経済学例解』とする。
- 2 Harriet Martineau, 'Preface' *Illustrations of Political Economy* xi.
- 3 Dorothy Lampen Thomson, *Adam Smith's Daughters* は、その代表的な研究書である。Jane Marcet, *Conversations on Political Economy in Which the Elements of That Science are Familiarly Explained* と並び、マーティノーの『経済学例解』が、経済学の普及に果たした役割を評価している。
- 4 Deborah Anna Logan, 'Introduction' *Illustrations of Political Economy* 23.
- 5 マーティノー『経済学例解』と、マーセット『経済学対話』の比較については、吉田成美「似て非なる『アダム・スミスの娘たち』」を参照。
- 6 Louis Cazamian, *The Social Novel in England 1830-1850* 37.
- 7 Deborah Anna Logan, *The Hour and the Woman* 134-35.
- 8 *Ella of Garveloch* 9. これ以後は、タイトルを *EG* と略し頁数と共に本文中に記す。
- 9 Catherine Gallagher, *The Industrial Reformation of English Fiction* 65.
- 10 岸英朗「ガーヴロツホのひとびと」『英文学思潮』61 (1988), 31-32.
- 11 *Harriet Martineau's Autobiography* I, 199-211.
Ruth Watts, *Gender, Power, and the Unitarianism in England 1760-1860* 127.
- 12 *Weal and Woe in Garveloch* 20 これ以後は本文中に、タイトルを *WWG* と略し頁数と共に本文中に記す。
- 13 川本静子『ガヴァネス』に、19世紀イギリスにおける余った女と女性の職業としてのガヴァネス、さらにそれらと植民地の関係等が詳述されている。中産階級向けの女性雑誌にも、植民地でのガヴァネスの希望者を募集する広告が掲載されている。(ex. *The Queen*)
- 14 Catherine Gallagher, *The Industrial Reformation of English Fiction* 65
- 15 岸英朗「ガーヴロツホの人びと」22。
- 16 Deborah Anna Logan, *The Hour and the Woman* 17。
- 17 岸英朗「ガーヴロツホの人びと」23。
- 18 Elizabeth Gaskell, *Mary Barton* 4。

- ¹⁹ ルイ・カザミアンは、ギヤスケルが、『メアリ・バートン』を執筆するにあたり、アダム・スミスの著書を読んだとしている (*The Social Novel in England 1830-1850*, 214)。さらに、Jenny Uglow は、ギヤスケルが意図的にマーティノーらの功利主義思想と距離を置こうとしたものと解釈している (*Elizabeth Gaskell* 192)。
- ²⁰ Watts 185。
- ²¹ Josephine Guy, *The Victorian Social-Problem Novel* 10。
- ²² Valerie Sanders, *Reason Over Passion* 195。

References

- Cazamian, Louis. *The Social Novel in England 1830-1850*. Trans. Martin Fido. London: Routledge & Kegan Paul, 1973.
- David, Deirdre. *Intellectual Women and Victorian Patriarchy*. London: Macmillan, 1987.
- Gallagher, Catherine. *The Industrial Reformation of English Fiction*. Chicago: U of Chicago P, 1985.
- Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton: A Tale of Manchester Life*. Ed. MacDonald Daly. London: Penguin, 1996.
- . *The Letters of Mrs Gaskell*. Eds. J.A.V. Chapple and Arthur Pollard. Manchester: Mandolin, 1997.
- Guy, Josephine. *The Victorian Social-Problem Novel*. London: Macmillan, 1996.
- Kestner, Joseph. *Protest & Reform: The British Social Narrative by Women, 1827-1867*. Madison: U of Wisconsin P, 1985.
- Logan, Deborah Anna. Introduction. *Illustrations of Political Economy*. Toronto: Broadview, 2004.
- . *The Hour and the Woman*. Northern Illinois UP, 2002.
- Marcet, Jane. *Conversations on Political Economy in which the Elements of That Science are Familiarly Explained*. London, 1816.
- Martineau, Harriet. *Illustrations of Political Economy*. London: Charles Fox, 1832-34.
- . "Mrs. Marcet". *Biographical Sketches*. New York: Leypoldt & Holt, 1869.
- . *Harriet Martineau's Autobiography*. Intro. Gaby Weiner. London: Virago, 1983.
- . *Deerbrook*. London: Penguin, 2004.
- Sanders, Valerie. *Reason Over Passion*. London: Harvester, 1986.
- . "Harriet Martineau and Elizabeth Gaskell." *Gaskell Society Journal* 16 (2002) : 64-75.
- Tillotson, Kathleen. *Novels of the Eighteen-Forties*. Oxford: Oxford UP, 1954.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell*. London: Faber and Faber, 1994.

Webb, R. K. *Harriet Martineau: A Radical Victorian*. London: Heinemann, 1960.

船木恵子 「経済学史におけるハリエット・マーティノウ『経済学例解』」『武蔵大学総合研究紀要』16: 151-169

川本静子『ガヴァネス』みすず書房、2007.

岸英朗「ガーヴロフホの人びと — ハリエット・マーチノウおぼえ書き」『英文学思潮』61(1988);19-32.

———. 「マーチノウふたたび」『英文学思潮』62 (1989) : 49-69.

松本三枝子「Harriet Martineau と家父長制(1) — フェミニストの社会学者が書いた小説 *Deerbrook*」『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)』, 30 (1998) : 117-135.

———. 「Harriet Martineau と家父長制(2) — *The Hour and the Man* における黒人指導者の栄枯盛衰」『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)』, 31 (1999) : 101-117.

———. 「否定された女のセクシュアリティ — ハリエット・マーティノーの『ディアブルック』」玉崎紀子、鈴木美津子、松本三枝子他『恋愛・結婚・友情 — アフラ・ベーンからハリエット・マーティノーまで』英宝社、2000.

松岡光治 (編)『ギヤスケルの文学 — ヴィクトリア朝社会を多面的に照射する』英宝社、2001.

直野裕子 (訳)『ギヤスケル全集2 メアリ・バートン』大阪教育図書、2001.

桜井毅「マーティノウ『経済学例解』(1832 - 34) の刊行まで」『武蔵大学論集』50 (2003) : 201-63.

佐野晃「英国状況小説 — ギヤスケルとディズレイリ」松村昌家、川本静子、長島伸一、村岡健次 (編)『英国文化の世紀』第2巻、研究社、1996.

吉野成美「似て非なるアダム・スミスの娘たち — マルティノー著『経済学実例集』にみるマーセットの影響」『生駒経済論叢』3 (2009) : 225-246.